

■読みに困難のある子どもたちへの実践事例

読みの困難を抱えた児童への読書活動での活用③ —情報を活用し学びに生かす

松江市立意東小学校
井上賞子

研究の目的

読みに困難を抱えている対象児童に対し、音声の補助がある読書環境を整えていくことで、読書から得られた情報を活用して学習場面に生かしていく体験につなげていく。

活用の実態

〈対象児童と介入前の状況〉

●入学直後

Aさんは、自閉症・情緒障害特別支援学級の3年生です。入学した段階では、1文字も読むことができず、自分の名前のかたまりの判別も困難でした。

読み聞かせの場面では、楽しそうにお話を聞く様子も見られたことから、聞くと状況をイメージすることはできていたと推察されますが、自分から絵本を手取る姿も見られませんでした。

また、基本的な名詞や動詞の語彙はありましたが、形容詞や擬態語などはわからない言葉が多くありました。

家庭での様子を聞いても、ストーリーのあるアニメーションはあまり好まず、ゲームをして遊ぶことが多いと

のことでした。

●1年時

音と文字をつなげていくことを意識しての取り組みの中で文字の習得が進み、マルチメディアDAISY教科書などを活用し、「音を補う」ことで内容の理解も確かになっていきました。

しかし、自分から本を手取ることはなく、あくまでも「読めと言われたから読む」という状況で、「読書を楽しむ」というところまでは至っていませんでした。

●2年時

わいわい文庫のポスターの活用→絵本アプリの導入→読書記録での振り返りと、音声図書の活用を広げていく中で、「読みたい本を選んで読書を楽しむ」姿が広がっていきました。

音声図書を一年間で400冊近く読む中で語彙も増え、絵の多い紙媒体の図書や漫画などにも関心が向くようになりました。(『わいわい文庫活用術⑥』に収録)

- その後、単元の学習の中で、干し柿農家さんやスーパーマーケットへ見学に行った際も、「質問する」具体例をたくさん読んでいたこともあり、知りたいことについてスムーズに自分から話しかけることができました。

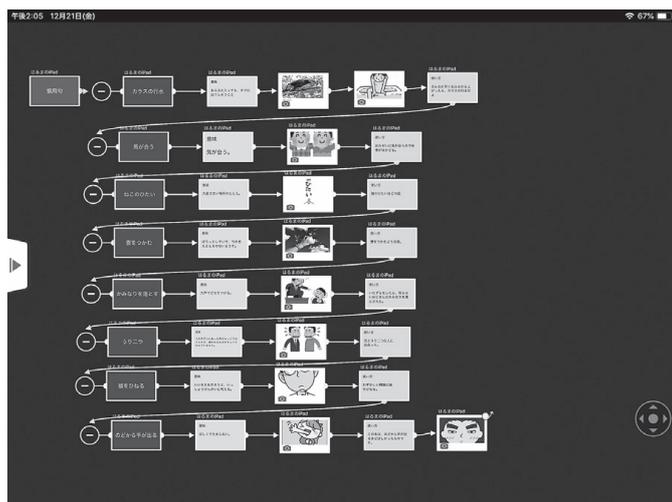
〈国語での活用

「ことわざになった野鳥」

- 「慣用句」の単元に入る前に視聴。
- いくつかの言葉が結合して、その全体で一つの意味をあらわすことについてイメージをもつことや、使い方を知って楽しむことをねらいました。
- 動物が好きなので、導入から意欲的に読み進めていました。「千鳥足」のところではくすくすと笑い始め、「こんな感じ?」と実際に動作化して見せてくれました。



- ロイロノートに慣用句をまとめていく際は、「写真とか絵があったほうがいい」と自分から提案し、「からすの行水」については、「わいわい文庫」のスクリーンショットをとってスライドにまとめていました。
- 教科書に出ている慣用句をまとめていく時も画像検索をして、同様にまとめていました。
- 「馬が合う」「ねこのひたい」といった言葉をまとめながら、「ことわざになった動物の本もあるかもね」と話していました。



〈外国語活動での活用「ABC アルファベット絵本」

- 1学期から何度か取り上げて、視聴。
- 母国語でない英語の言葉について、「正確な音」と「イメージとしての画像」を両方の情報を補いながら読んでい

くことで、英語に親しみをもつこと、アルファベットについて、形を意識づけていくことをねらいました。



- 量が多いので、「今日はAを読んでみよう」といったふうに、隙間の時間を使って1つずつ視聴していくところから始めました。
- 最初は復唱しようと思っても、聞きなれない音にまねることもできずにはじめましたが、次第に復唱できる言葉

が増えました。

- 外国語活動でのアルファベットの学習に合わせて「Aの練習をした日はAのつく言葉」を読むようにしました。
- ゆっくりのペースで、繰り返し視聴する中で「にんじんはキャロットだよ」と話すなど語彙の広がりも感じられました。

〈Aさんの学びの広がり〉

- 関連書籍を教科学習の取り組みに合わせて「わいわい文庫」を活用したことで、「あそこに書いてあったよね」「こうしてたよ」と、得た情報を参照して学ぶことができました。
- ここであげた3冊はいずれも、「もくじ」で調べてから情報にアクセスすることの有効性も体感できるものでしたので、「もくじ」で確認してから効率よく知りたい情報を探することもできるようになりました。

〈考察〉

- 音の支援はAさんにとって有効であり、それがあつことで書かれている内容の理解が支えられています。昨年度の取り組みを通じ、「読書を楽しむ」ことができるようになってきたことが、今年度の「情報活用」の体験につながったと考えています。
- 今年度、意図的に教科学習にからめて「わいわい文庫」を活用したこと

で、読書によって得た知識を活用したり、参照したりして学んでいく体験につなげることができました。

- 学年が進むほどに、学習していく情報量はどんどん増えていきます。その際、「読んで楽しんで終わり」だけではなく「読むことを始まり」として、図書を活用できることは、学びを支え、知識や思考を確かなものにしていくうえで重要になると考えています。
- 今後もこうした関連図書を音声で読める環境を整え、Aさんの学びの深まりや広がりにつなげていきたいと考えています。

来年度に向けて

今年度の取り組みをさらに広げ、「数種類の書籍を比較して自分にとって必要な情報があるものを選ぶ」体験や、読書で得た知識を他の学習の場面で関連づけて思考していく経験につなげていきたいと思います。

そのためには、日常の教科学習に関連する本にアクセスしやすくなる環境が重要です。どんな学習の時にどの音声図書が参考になるかについての情報を整理していくことと、Aさんにとってそうした情報を得るために有効な提示のあり方について、探っていききたいと考えています。

